

浄土

1986-4

昭和十年五月二十日 (第三種郵便物認可) 毎月一回一日発行
昭和二十四年四月二十八日 (運輸省 特別授承認雑誌) 第三二五号
昭和六十一年三月二十五日印刷 昭和六十一年四月一日発行

第五十二卷

四月号





四月の秀句

のどかさ寝てしまひけり草の上

松根 東洋城

大空にたゆたふ雲や花まつり

河合 雅之

山門をとほして遠き花御堂

岡村 浩村

四月号



無縁の慈を以て諸の衆生を摂した
まう。

——『観無量寿経』真身観文

目次

法 話

「花まつり」雑感……………宝 田 正 道……(2)

《特別寄稿》

浄土宗での追善の意義……………須 藤 隆 仙……(7)

＜連載＞ 一紙小消息 ⑨

本願に乗じて往生する……………村 瀬 秀 雄……(11)

み仏とともに =13=

——感涙にむせぶ父——……………安 居 香 山 ……(17)

寄 稿

在家よりのお願い……………守 屋 正……(22)

＜現代詩コーナー＞轟(とどろ)く……………清 川 宗 治……(26)

河西回廊の秋

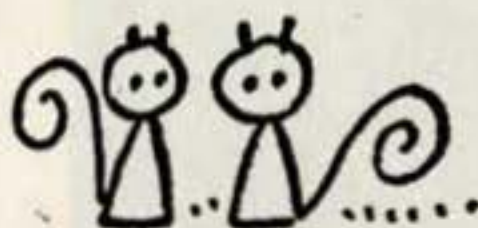
「五大石窟の旅」旅日記(九)……………木 下 隆 一……(29)

◇◇ 長篇連載小説 ◇◇

立ち止まるな善導 第22回……………寺 内 大 吉……(35)
神聖病後遺 挿絵 松濤 達文

表紙絵「白花延齡草」 松浦春子 画

「花まつり」雑感



宝田正道
たからだまさみち

○
寺に生れ寺に育った私は、子どもの頃、毎年のように「花まつり」の手伝いをさせられた。今から六十余年もむかしのことで、昭和にはまだなっていない、大正末期のことである。

当時、大阪市近郊のわがH町は、菊人形で名高かったが、淀川沿いに長細く東西に走る街道筋以外は、山あり小川あり原っぱありで、まだ開発も造成もほとんどされていない、田園情緒豊かな田舎町の一つであった。

お彼岸の法要に集まる人々やお墓参りに来る檀信

徒たちの姿で、ひととき賑わいを見せた寺も、それがすむとすぐ、ホッと息つく暇もなく、四月八日の「花まつり」の準備にかからなければならなかった。私はその頃、十二、三歳で、小学校五、六年生であったと思うが、花御堂をつくることと、甘茶の接待係をすることを、主な仕事としてあてがわれた。

水はぬるみ、桜の綻ぶ彼岸すぎは、さすがに春本番の暖かさで、野原にはスマレ、タンポポ、れんげ草なども、一せいに花開き始めていた。黄一色の菜の花畑やれんげ草の咲く空地の模様は、丘の上から眺めると、まことに美しい絨毯そのものであった。

「花まつり」が近づくと、私は弟妹たちと一緒にそれらの花摘みに出かけ、夕方にはれんげ草を主とした花々を、竹籠やざる一杯にして帰った。中には、川岸に生え出たツクシを沢山摘んでくる子もあった。それと、杉の新芽を集めたりもした。今のようにな、花粉症とやらで騒ぐこともなく、そんな症状で悩むことは、なぜか話題にさえ上らなかった。すべてが豊かな自然の環境に恵まれた古い平和な田舎町

の出来事である。

毎年のことなので、花御堂の組立は手馴れていた。大相撲の土俵よろしく、四本の白木柱を立て、その上に笠のように同じく白木細工の屋根をかぶせると、骨組ができ上がる。中央へ平たい水盤を置き、小さな誕生仏を真中に安置させればよいわけである。

摘んできたれんげ草をぎっしりと屋根に敷き詰め、四隅にタンポポをあしらって、黄色の飾りにした。外まわりには、杉の芽の緑やクローバーの白などを適宜配して清潔感を盛り上げた。

一方、一斗樽の中には、前夜から煮立てられた甘茶が並々と入れられるわけであるが、三和土にこぼれるのを防ぐためか、樽の周囲に杉の新芽を何段にも縛りつけて、緑色の菰かぶりのように覆った。

さて、四月八日の当日になると、朝早くから尼講の人たち（今でいう檀信徒婦人会）が大勢駆けつけて、庫裡の台所仕事を一切引き受け、法要に伴うお斎飯の準備や参詣人の接待その他に大忙しの働きを見せる。

美しく飾られた花御堂に、誕生仏をまつり、そばに置いた一斗樽に甘茶が一杯注ぎ込まれると、準備は万事OK。私たちは、甘茶番ということで、弟妹たちと一緒に花御堂のそばに陣取り、甘茶を施すわけであるが、緊張の中にも心は何となく、わくわくして楽しかった。

顔見知りの友だちをはじめ、一升瓶やサイダー瓶など、思い思いの容器をもってやってくる、主として子ども相手に、私たちは競い合って甘茶を分け与えた。中には、幼児をおんぶし、薬缶を下げた、若い母親や中年のおじさんがやってくることもある。だれかが誕生仏の頭に、甘茶を注いで合掌すると、みんながそれを真似て、次々に瓶を小脇に抱えたままピヨコンと、てれくさそうに頭を下げる。そのしぐさが、何となく滑稽に見えた。しかし、今、想い出してもほほえましい風景であった。

甘茶は、その名のとおりに甘味あり、釈尊降誕の折、九つの竜が天上から甘露を吐き注いで産湯を使わせたという伝説に基づくもので、正式には五香水（五色水）という五種の香水を用いて、誕生仏の沐浴

用とするのである。「花まつり」を灌仏会とか浴仏節と呼ぶのも、これによる。しかし、一般に施す甘茶は、今流行のアマチャヅルの葉を蒸して揉み、緑汁を除いて乾燥させたものから作るという。飲料とするのはいうまでもないが、コココーラのように、「スカッとさわやか」にもならなければ、カルピスみたいに、「初恋の味」がするほど洒落た味でもなく、いわば鳥竜茶に砂糖を少々加えた程度の飲物にすぎない。

ただ、面白いのは、甘茶を硯に入れてすれば書が上達するとか、その墨で次の歌を書いて家に貼っておくと虫よけになるとかいう伝承のあることである。

昔より卯月八日は吉日よ

かみさげ虫を成敗ぞする

この紙片をさかさまに貼っておくと、長虫（蛇の異称）や紙下虫（糞蠅の子虫、すなわちウジ）が来ないという。また、この夜から蚊張を釣り始める地方

(高松市田村神社の御蚊帳垂神事など)もあって、釣手にこの紙片を結びつけておくと毒虫除けのまじないになるといわれている。

それにしても、なぜさかさまに貼るのか、今でも理由はよく分らない。

○

分らないついでにもう一つ。「花まつり」の名称について考えてみよう。

普通は、釈尊降誕会といい、仏生会、灌仏会、浴仏会、竜華会などの別称があることはよく知られている。ただ、竜華会に関しては若干の説明が必要だろう。

竜華会というのは、本来、弥勒菩薩が五十六億七千万年の後、この世に下生して華林園の竜華樹の下で説法するという会座のことである。三回にわたって行うので竜華三会、弥勒三会ともいい、円城寺では、毎年この名で弥勒菩薩を供養する法令をつとめる。

釈尊と弥勒とは、前仏後仏の関係こそあるもの

の、なぜ灌仏会Ⅱ竜華会なのか、合点がいかない人も多かるう。仏教関係の辞典にも「弥勒の出現を待たための法会」を意味するとだけしか出ていないので、今一つ納得性を欠く。

一方、この降誕会に「花まつり」という新名称をつけ、主として子ども中心の祭礼というイメージで定着させたのは、巷間には浄土宗の碩学として名高い渡辺海旭先生であるといわれている。その真偽は別として、先生は明治から大正、そして昭和初期にかけて、欧米仕込みの比較宗教学を日本仏教界にもたらし、その該博な知識と旺盛な文才を駆使して教界のみならず教育・社会事業その他にも八面六臂の活躍をして、偉大な功績を残した具眼の士であった。

先生がなぜ「花まつり」という別称を思いつかれたかについては、いろいろ考察できるであろうが、私は私なりに少くとも二つの理由があると思う。

一つは、いうまでもなく、四月は花の季節であり、豊かな色とりどりの花咲く中で誕生の行事をとめることは、ルンビニー園で無憂樹の花のかげに

呱呱の声を挙げた釈尊にふさわしいからであらう。

「花祭」という祝祭の習俗は、古くから各地で営まれた。例えば十二月から一月にかけて愛知県北設楽郡一帯で行われる神事舞踊、四月十八日に京都亀岡市の出雲神社で催される祭など、いずれも「花祭」といわれる他、神に花を献ずる儀式は至る所で見られる。特に卯月八日を期して農作に着手する地方では、魂祭の意をこめて山の神や田の神に花を捧げる信仰が盛んであった。これら日本古来の風習にヒントを得て命名の根拠とされたことも、十分に推考できるであらう。

二つには、人類救済の教主として偉大だった釈尊の生涯を、花のいのちになぞらえて讃嘆しようとする哲学的卓見である。

林芙美子は「花のいのちは短くて、苦しきことのみ多かりき」といって人生を詠歎したが、悠久の歴史からみれば、一化八十年に亘る大聖者の姿も、いわば宇宙の微塵にすぎずその教えは永遠ながら一生は正しく花のように短く、また苦しみに満ちていた、といえるだろう。生後数日にして母を失い、養

母に育てられながら異母弟との仲、結婚後の出家を妨げるラフラの誕生、後年同族デーバダッタとの競闘、それに開悟までの降魔や伝道教化の苦勞などを考えると、それは人間苦のるつぼであった。それらを克服の末、人道を愛し平等を尊び自由を重んずる教えを広めた釈尊の姿は、まさに寛容と仁愛そのものの、風霜虫害の苦に耐えて世界に開く大輪の花に喩えるのが最もふさわしい。

こうした意義を踏まえて名づけられた「花まつり」であるが、自然を失い花のいのちを愛することを忘れた現代の子どもたちにとっては、不幸である。「花まつり」の行事も廃れがちで、甘茶の施与もなければそれをもらいに寺を訪れる機会もとぎされている。アマチャヅルは売れても、甘茶で硯をすり、書道上達を期したり虫よけのまじないをしたりする子もいないだろう。楽しみはファミコンばかりと思い込んでいる今の子どもたちに、昔の「花まつり」はともかく、せめて野に出て花のいのちに触れる喜びがどんなにすてきなものか、味わわせてやりたいと思う。

特

別

寄

稿

浄土宗での追善の意義



○

最近、二、三の宗教雑誌で、ある人が盛んに、「浄土教では、死んですぐ極楽往生すると説くのだから、その後で四十九日法要や年回法要などの追善供養をするのは、おかし

須^す藤^{どう}隆^{りゅう}仙^{せん}

(函館称名寺住職)

い。教義違反である。それを浄土宗や真宗の坊さんたちは平気でやっている。とんでもないことだ」といった意味のことを述べているのに出くわしました。

これは非常に間違った見方ですので、一言しておきたいと思います。以下は、浄土宗の

立場について述べさせていただきます。

お説の通り、浄土宗の教えは即得往生（速かに極楽に往生する）ですが、それは念仏を称えた人に限られるのです。口称念仏が阿弥陀如来の宿願であられるからです。

だが私たちの無数のご先祖の中には、不幸なことに、念仏を称える勝縁に恵まれることなく亡くなった人もたくさんおります。年回法要というのは、単に、先立った父母とか兄弟とかだけの追善ではなく、併せてそういった無縁の遠い先祖のご供養もすることなのであり、このところを忘れてはなりません。追善供養には、お念仏を称えることが一ばん最上の供養なのであって、それは凡夫のこの私が阿弥陀如来様のみ力を頂くことであり、その頂いたみ力を、それらご先祖様に振り向けて（回向しえこう）、その往生を具現させてもらうことで、法然上人はそここのところを、次のようにお示しになられております。

「亡き人のために念仏を回向し候えば、阿弥陀仏、光を放ちて、地獄・餓鬼・畜生を照し給い候えば、この三悪道に沈みて苦を受くる者、その苦しみ休まりて、命終わりてのち、解脱すべきにて候」
（『往生浄土用心』）

これは現代的にいうと、「南無阿弥陀仏」と称えることによって、忘れていた莫大な数のご先祖様の存在が認識されて、このご先祖様のお陰で、今日の自分があるという自覚になり、感謝になるわけです。かくしてご先祖様は、無縁の悪道の存在から、有縁の私を育ててくれる存在に一変したのであり、それが法然上人のお言葉でいう「亡き人の……解脱」ということであります。

次にそれでは、すでに生前、あるいは臨終

にお念仏を称え、確かにご往生しているのに、その方々に何で法事などして追善供養をするのかというと、この場合は、こちらからの報恩感謝の行いとしての念仏となります。

「ああ、今日は父親（又は母親、その他）のご命日である。親はよく念仏を申たされ方であった。今日自分があるのは直接この親（その他、恩人など）のお陰である。このご恩に報ゆるため、阿弥陀如来様ご本願の行である念仏を称えさせて頂きます」とこうなって、法事が勤められなければならないのです。法然上人は、ここところを、次のようにお教えになられました。

「孝養のために精舎建立の営みをなすことなかれ。心ざしあらば、おのおの群集せず、念仏して恩を報ずべし」（『御臨終の時門弟に示されける御詞』）

これは、極楽往生した人へ孝行しようとして寺院などを建てるようなことはしなくともよい。もしその心があったなら、わいわい徒らに人が多く集ったりせず、ただひたすらお念仏を申して、報恩の行いとしなさい、という意味であって、非常に大切な法事の心構えであります。



このように、浄土宗には追善供養に二つの意味があって、①極楽往生した人へは報恩感謝のため、②無縁の人へは拔苦与楽即得往生のため、と、法然上人のご教示にハッキリとあるのであります。

とくに法然上人は、「孝養の心を以て、父・母を重くし思わん人は、まず阿弥陀ほとけにあずけまいらすべし。我が身の人と成りて往生を願ひ念仏する事は、ひとえに我が父・母の養いたてたればこそあれ。我が念仏し候

功德をあわれみて、我が父・母を極楽へ迎えさせおわしまして、罪をも滅しましませと思わば、必ず必ず迎えとらせおわしきさんずる也」(『或る人に示せし詞』)と教えられて、父母への報恩追善には、念仏が最上であることを力説しておられます。浄土教に追善供養はなはずとの意見は、考え過ごしであり、至当ではありません。

また、四十九日の仏事は、死者の霊が四十九日間滞在するという思想から来ており、七日目七日目に善悪を計る裁判が行われるなどという俗説があり、七日目七日目に供養をするわけですが、浄土宗ではこういう説を取りません。

浄土宗三祖良忠上人は『往生礼讃私記』の中で、はっきりと、浄土の信者が亡くなった際は、中陰(ちゅういん)（四十九日）というものはないのだ、と明言されております。ただし善導大師のお弟子であられた懷感禪師は、『釈浄土群疑論』の中で、浄土の信者が亡くなった場

合、中陰のようなものはあるが、しかしそれは極楽の蓮華の上に乗るのであるから、穢土(えど)（この世）の中陰とは全く異なる、ともいっておられます。それで浄土宗では四十九日の仏事も専らお念仏を称えるのであって、四十九日仏事という實際世間の風儀を、念仏増進の勝縁とするわけであります。決して、亡霊が四十九日間フラフラいるからなどといった意味で営んでいるのではないのです。法然上人がお亡くなりになられたときも、お弟子たちは、念仏中心の四十九日法要を行っておりまし、法然上人のご伝記である『勅修御伝』の中には、お弟子が「四十九日の念仏」の功德で、下品(げぽん)の位から上品に進んだとの話もあります。

年回等の法要は、念仏増進の機縁として、浄土宗としての立派な追善供養の意義があるのですから、よくそのことを知っておいて、惑わされないように信仰生活をしなければなりません。

本願に乗じて往生する

村瀬 秀雄
むら せ ひで お



「いま弥陀の本願に乗じて往生しなんに、
願として成ぜずと云事あるべからず」

阿弥陀仏の本願に乗じて極楽往生したいと願えば、その者の願いの通りに往生できるのであって、少しの疑いもないことである。何故なら十方にまします仏たちは、次のように説き給うているからである。

「阿弥陀仏の本願の力は、その名号を聞いて

往生したいと願う者があれば、一人も洩らすことなく極楽浄土に迎えとり、再び退くことのない位に自然につける」(無量寿経)

阿弥陀仏は念仏往生の本願をたて、実に長い間にわたって修行を積み、その功德によって本願を成就し給うた。この本願を信じて念仏を唱えれば、仏が修行によって得給うた功德がわれ等の上に働いて、どのような者でも往生させ給うのである。善導大師は次のよう

に説いた。

「念仏を唱えれば善人であつても悪人であつても區別されずに、すべての者が往生できるのである。そのわけは阿弥陀仏が成就し給うた本願に具わっている功德に乘じ、その力の助けを被って往生できるからである」(觀經玄義分)

念仏を唱えれば本願の功德の力が、どうしてわれ等の上に働くかといへば、仏が修行の功德をわれ等に廻向し給うからである。法然上人は次のように説いた。

「阿弥陀仏は法蔵菩薩としてご修行中であつた時に、念仏を唱える者は誰でも極樂淨土に迎えとるであろうと誓ひ給うた。そして実に長い間にわたって修行して本願を成就し給うたが、仏はこの修行の功德を人々に廻向し給うのである。このように仏の力をかりるのでなければ、穢れた世にいるわれ等のような愚かな者がどうして迷いの世界から抜け出すことができるであらうか」(三部經釈)

凡夫が往生できるというのも、仏の本願力の助ける被るからである。曇鸞は仏の力を転輪聖王に喩えて、次のようにいつた。

「劣つた凡夫が力が足りない驢馬に跨つていただけでは、いかに努めても空高くあがることのできない。しかし転輪聖王の行列に加われば、卑夫といへどもたちまち虚空を飛んで、何んの妨げを受けることなく世界を巡ることができる。このように空を馳けめぐることができるのは転輪聖王の力であつて、これを他力という」(往生論註)

念仏を唱えれば本願の功德の力がわれ等の上に働くことを信じ、この身を仏に任せれば本願に乗ずることができ。任せきらないで自分の計らいを先にすると、本願に乗ずることができない。法然上人は常に次のようにいつていた。

「他力本願に乗じて往生できる場合に二つがあり、乗じなくて往生できない場合に二つがある。本願に乗じない場合の一つは罪をつく

った時に乗じない。そのわけはこのような罪をつくったのでは念仏を唱えても往生できるかどうか判らぬと考えた時に、他力本願に乗じないからである。他の一つは仏道修行に精励する心を起した時に乗じたい。そのわけは同じく念仏を唱えるにしても、このように修行に励む心があつて唱える念仏であるから往生できるのであつて、精励する心がなくて念仏を唱えても往生できないであらうと考え、精励する心を第一とし、仏の本願を二の次に考えた時に他力本願に乗じないからである。本願に乗ずる場合の一つは罪をつくった時に乗ずる。そのわけはこのような罪をつくったのでは必ず地獄におちるに相違ないが、幸いにも本願の念仏を唱えれば必ず往生できると思い、嬉しくて喜ぶ時に他力本願に乗ずるからである。他の一つは仏道修行に精励する心を起した時に乗ずる。そのわけはこの程度に仏道修行に励む心を起しても、それだけでは往生できないと思うからである。この程度の

心ならば今までに何度起したか判らないというのに、いまだに生死の世界から離れずにいる。修行に精励する心があつてもなくても、罪が軽くとも重くとも問題にせず、ただ本願の念仏を念々に相續してゆけば、その功德によつて往生できるのであると思つた時に他力本願に乗ずるのである」(常に仰られける御詞)

念仏を唱えれば必ず往生できるのは本願力によつてできるのであるから、その他の修行の功德があつてもなくても往生に関係がないのである。上人は常にいつていた。

「本願の念仏は、念仏を唱えるだけで往生できて、その他の善根功德の助けをかりなくてもよいのである。助けというのは智慧の修行も助けであり、戒律を守るのも助けであり、悟りを求める心も助けであり、慈悲心を起すのも助けである。善人は善人のままで念仏を唱え、悪人は悪人のままで念仏を唱え、ただ生れつきの姿のままで念仏を唱える人を、念

仏に助けをかりない人というのである。しかしながら悪を改めて善人となって念仏を唱える人は、仏のみ心に叶った人である。仏のみ心に叶わないからといって、あれこれ迷った挙句に必ず往生できるという信心が起らない者は結局往生できない人である」(同上)

ある人が上人に問ういうのに、戒律を守っている人が数少なく念仏を唱えるのと、破戒の者が数多く念仏を唱えるのでは、どちらが勝れているかということであった。すると上人は坐っていた畳の表を指さしながら答えていった。

「ここに畳が敷かれているから、破れているとか破れていないとかを論ずることになる。もし畳がなければ、どうして破れているとか破れていないとかが問題になるであろうか。それと同じように末法の世の中には持戒もなければ、破戒もないのである。あるものは無戒の名ばかりの出家者である。伝教大師は末法燈明記の中で無戒の出家者について詳しく

説いている。今時に持戒と破戒の是非を論じても仕方のないことである。このような末法の凡夫を救うために阿弥陀仏がおこし給うたのが念仏往生の本願であるから、ただただ急ぎに急いで念仏を唱えなくてはならない」

(十二問答)

信西の孫にあたる聖覚は論議と説法の二道を兼ね具え、登山状を起草した程の僧であったが、次のように述べた。

「罪が深ければいよいよ極楽往生を願わなくてはならない。阿弥陀仏は破戒も罪障の深さも区別しないと説き給うている。善行が少なければますます念仏を唱えなくてはならぬ。三念五念の念仏でも必ず来迎すると説き給うている。徒らにわが身を卑下し、心を憶病にして仏の悟りの智慧、計り知れない深遠な智慧を疑ってはならない。たとえば高い崖の下にいて登れない時に、力強い人が崖の下に網をおろし、この網に掴まれば崖の上に引きあげてやるといったとする。その時に崖の上に

いる人の力を疑い、網の強さを危ぶんで、手を拱いて網を取らなかつたならば、決して崖の上に登れるわけがない。それよりは崖の上の人の言葉に従って手を差し伸べ、網を掴めばたちまち崖の上に登ることができる。仏が人々を救い給う力を疑い、本願力を頼みにしない人は悟りという高い崖に登ることができない。ただ仏を信ずるといふ手を差し伸べ、仏の誓願という網をしつかり掴まなくてはならない。歳月は電光のように早く過ぎ去り、命は朝露のように儚く、この身は芭蕉のように柔らかく、泡沫のように消え去ってゆく。僅かこの世の修行だけで忽ち迷いの世界から離れようとするのである。どうして悠然と諸行を兼ね修めている暇があらうか」(唯信鈔)

乗願房実源は仏の慈悲に身を任せて、勇み立って念仏を唱えるのであるといった。

「世間にて氣に入つた太刀や小刀を手に入れたと、夜は枕もとにおき昼は撫でたり眺めたりしている。それと同じことで念仏を心から

信じている者ならば、有難いことに思つて信じている心が外に現われるものである。念仏を唱えるにも勇み立って唱え、いつも変わることなく仏の慈悲に縋つて身を任せているように見えるものである」(勅修御伝第四十三)

阿弥陀仏が念仏往生の本願をたてたのは、人々が念仏を唱えて往生するようにと願ひ給うたからである。仏が願ひ給うている通りに本願に身を任せれば、本願に乗ずることができ。証賢は次のように述べた。

「念仏を唱えた者が往生できないならば仏にならないとまで誓ひ給うた重大な決意と引き換えてまで、われ等も往生させたいと思ひ召し給うたのである。どのような者でも念仏を唱えれば往生できることによつて法蔵菩薩は仏になり給ひ、仏になり給うたことによつて誰でも往生できることになった。それなのに人々の方から罪業が深いからといって往生を疑つたり、この身を本願に任せかねている小賢しい心があつたからこそ、今まで往生でき

ずにしたのである。今からでもよいから己れに罪のあるなしを考えずに、身を本願に任せて頼み奉れば、取りも直さず本願に乗ずることがができる。本願に乗ずることができれば、寿命を終って直ちに極楽浄土に往生できることは些かも疑いがないのである。

われ等のように罪深い者が往生できるわけがないのは、積った雪の下から竹の子が生えるわけがないのと同じことである。しかし阿弥陀仏は人々を救わねばやまない深厚な慈悲心からたてた本願を成就し、念仏を唱えた者を是非ともわが極楽浄土に往生させたいと懇ろに願ひ給うている。この仏の願ひが虚しくならず叶ったために、念仏を唱えた者がすべて往生できるのは、孟宗が願った心が切実であつたために雪の下に竹の子が生え出したように、仏の願ひが懇切であつたからできるのである。このように凡夫が仏の願ひによつて往生できることを、本願に乗じて往生できるといふのである。われ等にとって仏の願ひ

が叶つたことこそ返す返すも大きな喜びなのである。孟宗が心から願つたことによつて、たちまち雪を破つて竹の子が生え出したのであつた。阿弥陀仏が必ず往生させたいと願つてたて給うた本願の念仏であるから、どうして一声の念仏で煩惱の罪を払い退け、往生できないことがあるか。われ等のような凡夫でも往生できるようにとの計らいは、阿弥陀仏が本願の中に用意してたて給うている。南無阿弥陀仏と唱えれば、仏はどのようににでも計らい給うであらう。往生は自分の力ではできないのである。仏は十劫という遠い昔から人々が往生したいと願つて南無阿弥陀仏と唱えるようにと願ひ給うている。われ等もまた往生したいと願つて南無阿弥陀仏と唱えている。われ等の願ひは、仏が願ひ給うていることと少しも違つていない。そこで仏が願ひ給うている力が専らわれ等の身の上に及んでゐる。われ等はいつても本願の中に包まれながら暮しているのである」(帰命本願鈔)(つづく)

みにととも

=13=

—父せむに涙感—



山 香 居 安
さん こう い やす

(大正大学教授・文博)

福知山の冬は、たちまち零下になって凍りついた。雨はやがてみぞれや雪になり、軍靴はいつもぬれて冷えていた。鼻は赤くなり、手はかじかんだ。こんな福知山で、十二月も終りに近ずいた頃、教育隊の卒業式が営庭で行われることになった。

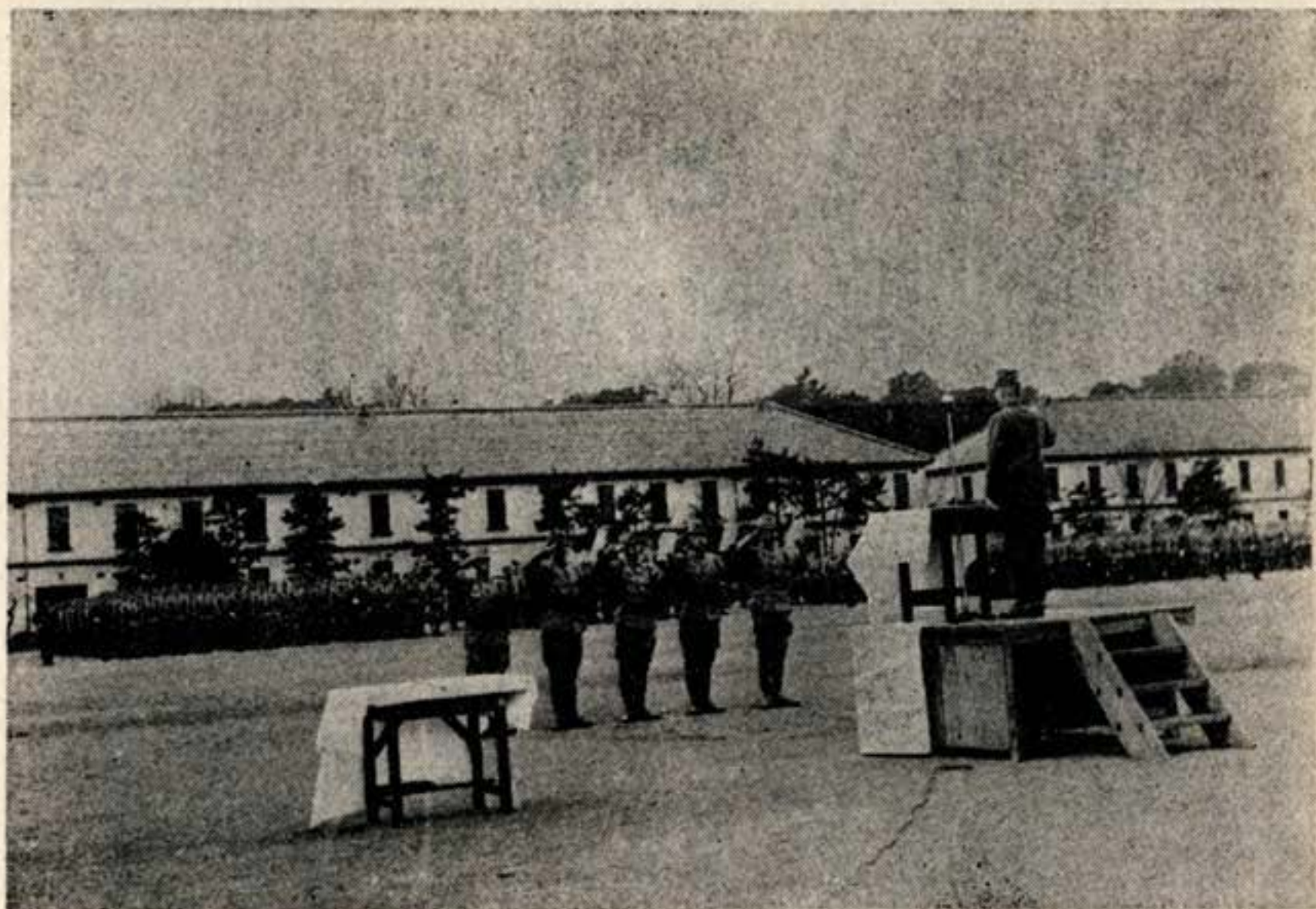
当日は勅使として中部軍司令官の河辺中将が見えるということ、その卒業予行が、寒空の中で、何回か行われた。その時の恩賜受賞者は、私を含めて五人であったが、誰であったか、はっきりと覚えていない。とも角、私が首席で、代表して答辞も読むことになっていた。

受賞することは有り難いが、司令官から恩賜品を頂いて、それを目の高さに片手で捧げ持っていることは、手のかじかんだ私達にとっては、大変であった。予行演習の時も、隊長から、

「よいか、落したりしたら、切腹ものだぞ。死んでも落してはならぬ」

と注意を受けた。

私が一番最初にもらい、それから順次四人の者がもら



——教育隊卒業式風景——

ったわけであるが、式が終るまで、この恩賜品を捧げ持っている苦労は大変なものであった。もうその時の苦しさは忘れてしまったが、まさに必死であったに違いない。

この時の服装は、第一礼装を着ているものの、ゴンボ剣をつるして、兵隊である。この卒業式が終って、始めて青刀帯のバンドを服の上に締め、日本刀を吊す見習士官となるわけである。私はそれまでの我慢と、その日の受賞に頑張った。幸い五人共なんの事故もなく、卒業式を終わった。多分、隊長達もホットしたことであろう。

恩賜品は、昔は軍刀であつたらしいが、その頃は、もう軍刀も少なくなり、銀の文鎮であつた。それでもつまみは十六の菊の御紋になっていて、御賜を浮き彫りにした優雅なものであつた。この文鎮は、いまでも私の机にあって、私の勉学を助けてくれている。そして、それを見るたびに、感慨に耽っている。

卒業式の後、私達は見習士官として日本刀を吊り、体育館の祝賀式典に臨んだ。恩賜組は、中部軍司令官や、教育隊長の前に坐らされた。これも又緊張の連続で、どのように食事をしたか、余り覚えていない。

ななめ前に、谷中隊長もおられたが、私の方を向いて

ニコニコしておられた。恐ろしい鬼隊長とは、打って變っていた。位こそ違え、将校の中間入りをしたのであり、いくなれば同僚となったわけである。

「安居見習士官、おやじさんが泣いていたぞ」

その時、谷中隊長が、私にこのように声をかけられて、私はびっくりした。

「私は、何も知らせておらないであります」



——筆者と父——

「いや、俺が電報を打って、呼んでおいたのだ」

これには、更にびっくりした。

「後で隊長室に来なさい」

なんということであろうか。そして、なんと温情ある配慮であろうか。福知山の教育隊に来て半年程であるが、ついぞ、父と面会したこともなかった。手紙こそやりとりしていたが、勿論、卒業式の事などは連絡していなかった。又、呼びだせるなどとは考えてもいなかった。それが、なんということであろうか。

卒業式の分列行進をしていた時も、多くの人が見ていたが、福知山の街の人びとと思っていた。その中に、父がいようとは、夢にも思わぬことであった。

祝宴が終って隊長室に行ってみると、確かに父が来ていた。国民服を着て緊張ぎみであったが、ニコニコしていた。そして、一言、「おめでとう」と声をかけて、後は何も言わなかった。

その時大橋区隊長が、

「これから三人で記念写真を撮りにいこう」

と言ひ、私達二人を街につれ出して、写真屋で記念写真を撮ってくれた。区隊長もさぞ喜んで下さったのである。こうした配慮は、破格のことであつたに違ひない。それは勿体ない程である。そんなわけで、その時の写真がいまも残っている。よい思い出である。

○

卒業すると、一端、私は敦賀の連隊に帰つた。しかし、一週間程で命令がでて、私は福知山の教官に命ぜられ、第一中隊に配属された。中隊長は奥山中佐で、私が育つた二中隊とは、隣り同志であつた。副区隊長として、私達の後にくる学徒兵を、早速教育することになつたわけである。そして私は、ここで、第十二期、第十三期生を教育して、終戦を迎えることになる。

ここでもう一人、同じく卒業生で、第一中隊に配属されて来た人がいた。それがなんと伊藤淳二見習士官であつた。もうこの人については、ここで述べるまでもなく、時の人で、カネボウの会長があると共に、この一月、日本航空副会長になつたその人である。そして私は、彼と約半年程、同じ部屋で起居を共にし、候補生教

育をすることになった。

伊藤君の詳しい伝歴は知らないが、慶応の経済学部を出た優秀であつた。しかしその彼が、将来、大鐘紡の社長になり、会長になる人とは、夢にも考えていなかった。勿論、彼自身も、その当時、そんなことも予想していなかつたに違ひない。

彼は、今でもそうであるが、物静かな人で、喋り方も温和であつた。しかし、何かメガネ越しに見える目には、深い光りがあつた。二人は、部屋の壁に世界地図を貼り、日本軍が占領した地域に、日の丸を書き込んでいた。しかし、その日の丸も、日に日に後退をしていくことが、明らかであつた。或る日、伊藤君は、

「これじゃ、日本もあぶないね」

と、誰いうとなくつぶやいたことを、はっきり覚えてゐる。彼は彼なりに、思慮深く、時の流れを見つめていたようである。単純な私は、余りこうしたことが考えられなかつた。そして、とも角、死ぬまで戦うのだと、単純に考えていたようである。そうした思慮深さが、やがて

伊藤君の将来を築いていったに違いない。

どうした命令がでたのか、その後伊藤君は転属していった。そして、私との生活は、短く終わった。

しかし、この繋がりには、戦後しばらくして福知山会という当時の将校の集りが復活した。そしてその中心になったのが、外ならぬ鬼隊長である谷武雄隊長であった。

隊長は、その後、チタン会社の社長などをしておられ、坪坂君という私達の同僚が、福知山会の世話役をしてくれた。そんなことで、ちりぢりになった福知山の将校連中が、年一回、全国から集って、旧情を温めることができた。

もうその頃の谷隊長は、好々爺で、「安居君」と言っていた。やさしく可愛がって下さった。そして、伊藤君とも、この会を通じて、再会した。すでにその時は、伊藤君は鐘紡の社長に、若いながらもなっていた。

伊藤君とは、終戦直後は頻繁に文通していたが、その後次第に疎遠になってしまっていた。再会した時、彼は鐘紡の社長で、私は大学の先生になっていた。全く人生等というものは、分らぬものである。そして、私のむすこの結婚式に、彼を招待するというようなつきあいを、

今なおしている。互いに忙しい生活をしているので、仲々会う機会もない。しかし、むすこの嫁が鐘紡本社に入社して、伊藤君の秘書にさせてもらったということも、考えてみれば、宿世の因縁とでもいうべきであらうか。ここにも、一人のみ仏がいるのである。

この外に、もう一人のみ仏が同僚の中にいた。それは現在社会党で、「とめ男」と有名をはせている大出俊代議士である。大出君も一緒に教育隊を出た仲間で、伊藤君同様に成績がよかった一人である。福知山に残った見習士官は、この外に十数人いたわけであるが、図上戦術などの見習士官の勉強会で、大出君の発言は抜群であった。判断力が早く、奇抜であったことを覚えている。今日政治家として活躍できるのも、そうした素質が大きな力となっているに違いない。

この大出君とは、中隊も別であったので、福知山時代は、特にこれという交流があったわけではない。むしろ戦後、ひょっとした事から、急に親しくなり、そして二人の間には思いがけないドラマが展開されることとなってしまう。そして、それはまことに、悲しいドラマとなつて終結することとなった。

(つづく)

在家よりのお願ひ

○

『ライフサイエンス』一月号に、仏教に関し暴論を吐いたものです。多くは弁解いたしません、深くお詫びいたします。しかしこの小論も結局はその自己批判になります。

まず浄土宗が立派な佛教大学という学苑を持た



守^{もり}屋^や 正^{ただし}

(医道顕彰会副会長)

れ、水谷学長以下がご熱心に研鑽され、四条烏丸に「仏佛教大学四条センター」をもたれ、一般人と深く交流されている点に深く敬意を表します。

次に在家の素人として率直に日頃考えていることを申します。齒に衣着せない点多々あることをお赦してください。

私は、仏教は世界最高の宗教と信じています。この高遠な哲理は、西洋その他の哲学、宗教に比べても、表面的ですが瞥見しましたが、やはり群を抜いていると思っています。殊に日本の仏教は独特に進化して、国情によくマッチしていると思います。国民は仏教を信じ、仏様を拝し、一千年以上を経過しました。先日比叡山の葉上照澄老師（中学、旧制高校の先輩）と話しましたが、「インドで仏教が減んだのは、釈迦の教えが、むずかしすぎたためだ」と仰言っていました。今でもインドは九〇％ぐらいが文盲とのことです。その点日本は世界最高の識学率だと思います。おそらくは世界最高にむずかしいと思われる日本語が読める教育普及は、大変誇りとしてよいと思います。ここに仏教存続の根拠があります。しかしこのあたりからそろそろ私の苦言を呈さねばなりません。

それは、何故現代の仏僧は経文を漢字そのままの棒読みにしなければならないのでしょうか。仏教伝来以来の習慣でしょうが、仏僧は専門に修行しておられるので、棒読みの方が便利なのでしょうが、在

家の不勉強者にはさっぱりわかりません。もうお経の呪文的効果は昔のようにはありません。私たちが在家のものは、高遠な仏教の哲理を知るところを熱望していますが、あの発音では全く意味不明です。私は中国に五年足らず居て、現代中国語（北京語）のカタコトは中国人にわかるように発音できますが、今の日本の仏僧のお経の発音は全く日本語化して、伝来当時の発音とは大分日本化していると思います。日本人にむずかしい捲舌音が現代中国語には特に多いのですが、日本の仏僧の発音にはそうした音はありません。これでは中国人がきいてもわからぬ独特のものに変化しているのではないのでしょうか。このことは多くの人も異口同音に申します。

私の推測が間違いかも知れませんが、キリスト教は日本では一％ぐらいの信者数ですが、どうもインテリ教の感があります。その理由は、バイブルの方がわかりやすいので入信するのだと思います。また西洋文明への一種のあこがれもあるでしょう。仏教哲理の高遠さとキリスト教とは相当の差があると思っています。すし、農耕民族としての日本人には一神教

は肌に合わないように感じます。「愛の宗教」としての倫理性（わかりやすい）がインテリを引きつけるのではないでしょうか。

私は仏教大学の学僧たちをお願いして、読経の日本語化をしていただきたいのです。一千年以上の習慣ですから、専門的には困難な面もあるでしょうが、仏教が二十一世紀に存続、発展するためには、こうした大転換が必要だと思います。曹洞宗の「修証義」、浄土真宗の「歎異抄」など日本語の教義文もあります。バイブルが子供にでもわかるように（戦後は口語体にしました）、お経を平易に説いていたきたいのです。

私は毎冬ハワイにしばらく滞在し、浄土宗ハワイ開教区の藤花教道師、原源照師らと昵懇です。今年はスペースシャトルで犠牲になった鬼塚氏のマウイ島の本願寺での追悼会にも列席しました。そこには子供も喜ぶようかなり厚い「歌の本」（キリスト教の讃美歌に相当します）が、各椅子の前の棚の中に置いてあり、一同合唱の「ナムアマダブツ」のメロディは実に明るく、むしろ楽しいものでした。こう

した在家のものが理解でき、喜ぶような仏教を日本の在家信徒にもお与えくださることを切望いたします。



次はやはり『ライフサイエンス』一月号にお書きになっていたホノルルの新出光祐師の「来迎」についての所感です。

私はあの一文で、多年求めていたものに対して開眼されました。深く新出師に感謝しております。昨年ホノルルに多年ご在住の藤花教道師のご案内で、ホノルルのクアキニ病院（日本人病院）を見学しました。ここの附属養老院は歴史的に極めて古く、大いに誇るに足る施設です。私はクアキニ病院は二十五年前に初めて見学してから三回目でしたが、今は壮大に改築されています、養老施設も七階建で、六、七階は将来のために予備になっています。この一階に立派な阿弥陀堂があります。藤花師は昭和の初めから、この養老院で毎週法話をし、老人を慰めて来られたことを承りました。実によいことです。ハ

ワイ在住の日系人は殆んどが仏教徒ですが、キリスト教の人もあるので、扉を閉めると、扉に十字架が貼りつけてあり、チャペルとしても使用できるようななっています。私が訪ねた時は牧師が説教しておられました。二十五年前に見学したニューヨークの市立病院には立派なチャペルがありました。

老人は余命をいつも考えています。そして仏前に合掌して、安楽往生を祈り、心の平安を念願しておられます。ハワイのこうした設備はこのために実に大きな役割をしております。しかるに日本の現状はどうでしょう。世界一の長寿を誇り、老人ホーム、老人病院は急増しています。しかし日本の老人施設にハワイのような阿弥陀堂があることをきいておりません。まるで僧侶と医師は仇敵ではないにしても、無縁の存在という感じです、私のように老医（七十七歳）は、書斎に両親と恩師の写真を飾り、仏像を安置して毎日合掌し、自分の余命安楽、過去への感謝をしておりますが、統計では（京大医学博士課程）八〇%の医師は無宗教で、六五%の医師は「医学に宗教は不必要だ」と言っています。驚くべきことで

す。この医師の宗教離れの原因を云々する紙数は今ありませんが、人の生命を取扱う医師（日本の）として誠に恥すべきことです。老人は安楽往生を願って、合掌する場所を老人施設の中に熱望しているに違いありません。また仏僧のわかりやすい、温い法話を切望しているにきまっています。

新出光祐師が書かれた如く、「病院と寺院」、「医師と僧侶」が今こそかく手を握るべき時です。一般には医師は金もうけに熱中し、僧侶は葬式を待っているように誤解されています。医師は「身体 of 医師」、僧侶は「魂 of 医師」として活躍すべきです。これは日本中の老人の声なき声です。「医学」は単なるサイエンスではありません。

世界最高の哲理、宗教としての仏教を国民全体にわかりやすく説いてください。そしてやがてこの世にお別れする人達が安らかにあの世に行かれるように教えてください。

以上が在家仏教徒としての私の、日々の信仰生活に想う切なるお願いです。

轟 (とどろく)

絶え間ない騒音――

高速道路と高架電車

救急車にパトカー、それに消防車のサイレンも

排気ガスを流して吠えるオートバイ

清^{きよ}
川^{かわ}
宗^{そう}
治^じ
(詩人)

うねりのような爆音の群れ

耳にこだまする都会の喧噪

心に突き刺さる不協和音の淀み

人の声も高ぶる、荒ぶる

怒鳴る、罵る、泣き叫ぶ

ヒステリーのトーンが高音階から落ちてくる時

鈍い唸り声が地下のコンクリートの割れ目からもれる

脅威と切迫に心を焦がしながら

夢を突き破って轟く睡魔の雄叫びを聴く

◎『浄土』表紙版画絵販売についての案内

『浄土』四月号をここにお届けいたします。

どうか、『浄土』誌の充実と継続のために、会員諸兄の皆さまの暖かいご支援とご高配を心よりお願い申し上げます。

好評の『浄土』誌表紙版画絵は、本年の正月号より、松浦春子先生の清楚な作品を頂戴しております。今回も、松浦先生のご好意を得て、豪華額縁に装丁して販売させていただきます。額縁代も含めて、金二五〇〇〇円というお求めやすいお値段で、季節感に溢れた芸術味豊かな版画掛物が購入できるわけです。どうぞ振替にてご注文願えば幸いです。

また、大きさの方は、『浄土』表紙絵よりはずっと大きく、約20cm×30cm位の大きさですが、額縁の大きさでいえば30cm×50cm程の大変豪華な一幅となります。

なお限定販売のため、予定数に達しましたら、申し訳ありませんが、おことわりさせていただきます。しかし現在のところ、昨年度の小林治郎先生の版画絵も、正月号から十二月号までの在庫も充分にありますので、ふるってご注文願えば幸いです。

(申し込み先) 〒102 東京都千代田区飯田橋一―二―一六

法然上人鑽仰会 振替(東京) 八―八二二八七

河西回廊の秋

「五大石窟の旅」旅日記（九）

—酒泉—



木^{きの}下^{した}隆^{りゅう}一^{いち}

（随筆家）

九月八日の目覚めは殊の外早かった。夕食が終わるや否や、それこそボタンキューだったから、睡眠は充分とれていた。いつになく気分は爽快である。例によって、同室の藤原さんの眠りを妨げないように部屋を出る。薄明の中、もう幾人も人が歩いている。工場労働者のような男の人、OL風の若い女性、小学生らしい女の子もいる。鼓楼に通じる大通りへ出ると、ここではすでに一日の動きが始っていた。驢馬や駱駝に引かれた荷車が、漬物用の白菜を満載して何台も通り過ぎる。酒泉ではもう冬仕度が始まっているらしい。道路は舗装されているが、細かい砂に覆われていて、歩道に溜った砂を、商店の連中が用捨なく車道へ掃き捨てるので、あちらこちらで砂塵が舞い上っている。ここも亦、紛れもなく砂の町であった。

紀元前一世紀頃、漢の武帝は西域経略のため、河西四郡の武威・張掖・酒泉・敦煌のオアシスを結

んで前線基地としたが、武威・張掖（きょうしやうどのひせいのちやう断匈奴之臂、やふしやうてくのえきせいはる張中国之掖（腋））という武張った名前や敦煌（大きく盛んなる所）のような誇大広告めいた名前とは異なり、酒泉という名はいかにものびやかである。他の三郡が最前線の純然たる軍事基地であったのに比べて、酒泉は後方にあつて、兵站と将兵の休養地としての役目を担っていたのではなかったかと私は思うのである。いつの時代の記録かは定かでないが、酒泉は鼓樓を中心に、周囲四・五キロメートルの高さの城壁と、幅二十五メートルの外濠で守られていたと言う。昨日渡った北大河が、外濠の名残かなという気がしないでもないが、城壁の方は面影すら残っていない。町の発展に支障を来たすという理由で、城壁は取り壊されてしまったというこ
とである。

今日の予定は、午前中酒泉市内観光。十四時三十分嘉峪関空港発の民航機で蘭州帰着という楽なスケジュールである。市の外れにある古い墳墓群の外観（恐らく内部は見せてもらえないだろうから）なりとも目に納めたいと思うが、そんな我儘が許されるはずはないし、また時間的余裕も無さそうである。市内観光と言っても、見るべき物はいま目の前にある鼓樓と酒泉公園、それに夜光杯を作っている工場くらいのものであろう。

皆さんより一足お先に鼓樓の下に立つ。

この鼓樓が造られたのは四世紀の五胡十六国の時代で、現在見られる物は明代に改築されている。当然その間にも何度か修復改築が為されたであろうが、位置はそれ程動いていないと思われる。鼓樓は煉瓦造りの高い台の上に建つ、木造の三層からなる堂々たる樓閣で、台には東西南北にアーチ型の入口が造られており、右から左に、「東迎華嶽、南望祁連、西達伊吾、北通沙漠」と書かれた金属板が、それぞれの入口の真上に嵌め込まれている。そして東西・南北に通じる道は、鼓樓の真下で交差している。鼓樓は時を告げたり、急を報せたりするためだけのものではなく、巨大な道標でもあつた

のである。私の目の前の北門には「南望祁連」と書かれている。つまり入口を入って行くと、やがて祁連山が見えて来るという意味である。以下、東は華嶽（長安／＼西安／＼にある山）を迎え、西は伊吾（現在のハミ、瓜の名産地）に達し、北は砂漠に通ず。——甚だ大雑把だが、鼓樓が造られた頃はこれで充分役に立っていたに違いない。いまは僅かに祁連山が望めるだけで、あとの三方はどこを見ても目に映るのは土屋の家並だけである。東門に廻ると、そこには二層目に右から「氣壯雄関」と書かれた大きな額が掲げられていた。入口はどこも鎖を廻して通行止になっているが、人はひょいと跨いで通っている。悪いなと思ったが、私も真似して中に入り、真中に立って、しばしいにしえの旅人の気分を味わう。いまはポプラの並木を持った幅広い道が続いているが、かつては四方のアーチ状の空間に広がる荒涼たるゴビを見て、旅人は来し方の難渋を思い、前途の不安に戦^{おの}いたことであろう。

束の間のタイムトリップから立ち返って外に出ると、町の喧噪はようやく高くなろうとしていた。朝食の後、酒泉公園の見物に赴く。鼓樓を過ぎて南へ約五百メートル、公園は道路の左側、粗末な土塀と門扉に隔てられた中に拡がっていた。花壇のコスモスが、いまを盛りと咲き盛っている。樓門を潜り、アーチ状の長い葡萄棚のトンネルを抜けると池畔に出るが、ここでも敦煌で見たのと同じような、無断採取者への警告を書いた短冊が、幾つも風に舞っていた。

池畔の筒井筒の中に渾々と清水が湧き出て、広い池に流れ込んでいく。地名の由来の酒泉である。筒井筒の前に李白の詩碑が立っていた。天若不愛酒／酒星不在天／地若不愛酒／地□無酒泉／（□は写真を拡大しても判然とせず。底か？）一応対句の形をとってはいるが、感心する程のものではない。長詩の中の一節であろうか。

要するに祁連山の雪融け水が伏流して地表に現れた所が酒泉であったわけであるが、酒泉に纏わる伝説は幾つもあるようである。一番ポピュラーなのは、漢の武帝霍去病^{かくきよへい}が、皇帝下賜の酒を泉に注い

で全軍の将兵に飲ませたところ、水は豊饒な酒の匂いがしたというのであるが、下賜の酒ではなく、土地の古老が献じた酒という説もあるとか。いずれにせよ、水に渴いていた将兵が驚喜して清冽な水を口にすることは明らかで、それは美酒にも増して甘露であったことは想像に難くない。中国へ来て、初めてここで泳ぐ小魚を見た。クチボソに似た魚であった。

夜光杯を作っている工場は、鼓樓の近く、幹線道路をちょっと西に入った所にあった。美術工芸廠の看析が無ければ、見落としてしまいそうな二階建のビルで、廠という字から受ける厳めしさとはまるで無縁な町工場であった。門を潜ると、中庭に大小様々な岩塊が転がっている、何の変哲もない岩であるが、祁連山系から掘り出された原石だと教えられた時、ふと「金剛石もみがかずば、たまの光はそはざらん……」という昭憲皇太后の御歌が頭をよぎった。

涼州詞 王諱

葡萄美酒夜光杯
欲飲琵琶馬上催
醉臥沙場君莫笑
古來征戰幾人回

挙げんかな夜光杯
乾さんかな赤き葡萄酒
誰が弾くやら馬上の琵琶に
我は酔ひ伏す砂の上
君よ愚かと言ふなかれ
昔よりここに戦ひ
帰り来し人稀なれば
(拙訳二十歳時)

夜光杯はこの詩によって有名になったと言っているだろうか。詩の方も亦、「唐詩選」に採られた事もある、大いに人口に膾炙した。涼州、いまの甘肅省武威県の辺りで歌われていた民謡のメロディに王諱が作詞したもので、月光にかざせば透き通るといふ夜光杯の怪しい魅力と、結びの句の「古來

征戦幾人が回る」の無情感が、いつの世にも人の心を打ってやまなかった。王諭（六八七—七二六）は至って豪放磊落で、希代の吞ん兵衛でもあった。家に歌手や役者を飼ひ、己を王侯に比すなど、世の顰蹙を買う処大であったが、何故か時の宰相張説に愛された。しかし張説の引退後はその言動が疎まれて地方官に落とされたが、終生その性格は直らなかつたと言う。三十八年という短い生涯を、奔放に生きた王諭ではあったが、この一篇の詩だけで彼の名は不朽のものとなつたのであるから、以て冥すべしである。

工場は二階にあつた。研磨機の音が鳴り響き、窓硝子を震わせている。石粉の飛散と機械の刃の部分の摩擦熱を下げるために、絶えず水滴を落としながら作業は進められているが、それでも石の焦げる匂いが鼻を突く。作業員は四十人程、女性の方が断然多い。原石を切断し削る作業は相当な重労働で、石を持つ作業員の手は猛烈に震動し、指光が白っぽく色を失っているのが痛々しい。一人が一つの物を原石から仕上げて行くのではなく、それぞれ得意のパートを受け持つ流れ作業で、杯が香炉が次々に出来上って行く。

作業場の隣に製品の展示室兼即売場がある私が秘かに探していた白玉の夜光杯は見当すらなかつた。もしあつたとしても、そんな貴重な物が囊中乏しい私に買えるはずはなかつたが、目にするだけでよかったのである。「玉はタマではありません。ギョクと読んで下さい」と教えて下さったのは、先頃文化勲章を受けられた西川寧先生であつた。三十五年前、大学一年の秋、漢文の講義の時のことである。その時、話が夜光杯に及んだかどうかは忘れたが、「玉はギョクか！」と印象深かつたのを覚えている。

夜光杯はカットグラスだという説もあるが、それではあまりにも夢が無さすぎる。やはり白玉から作られた物でなければならぬ。しかし、ここの夜光杯は暗緑色の石から作られていて、暗緑色の中



——酒泉鼓樓——

に僅かに白色の帯が細かい縞模様を為しているだけで、日にかざしても透けて見えるというには程遠かった。これに赤い葡萄酒を注げばどんな色になるかと思うと、とても買い求める気にはなれなかった。午後バスで空港へ向かう。四日間付き合ってくれた演歌好きの運転手君ともお別れである。嘉峪関空港も亦、ゴビの中の空港であった。遠く馬鬃^{マソウ}山脈の支脈の麓に沿って、何本も竜巻が生まれ、自ら移動しては崩れて砂塵となって消えている。生まれる所も消える所もほぼ同じである。十四時三十分発の飛行機はなかなかやって来ない。結局何もないまま、二時間十五分遅れて離陸した。後で聞くと、敦煌の天候不良で離陸を見合わせていたとのことだったが、真相は遂に判らず終いであった。十八時四十三分、雨後の蘭州空港に着く。今日も夕立が蘭州一帯を襲ったらしかった。肉体的な疲れはなかったが、待ち草臥れか、心理的には疲れた一日であった。

(続く)

立ち止まるな善導

〈22〉

寺内大告

挿絵・松 濤 達 文

神聖病後遺

七

僧尼は仏陀を拝すると同じように君主を礼拝すべきであるかどうか。礼拝する必要は全くない。この「不拝論」と「致拝論」のほかに、「兼拝」という主張もあった。有徳な僧

は不拝、無徳や初学の僧尼は礼拝すべし、という条件付きの論である。王宮に集った千余人の僧俗によってケンケンガクガク激論がかわされた。結論は得られず、議長格だった司礼太常の博覧は「俗官だけで評議したい」として僧たちの退堂を求めた。

司礼とは文字どおり礼を司る役官で、太常はその長官である。六十四名の俗官が代表と



して討議をかさねたが、明快な結論は出なかった。投票ということになって、不拝三十二、致拝二十九、兼拝三、と票は割れた。

僧たちの大半が不拝論だったので、俗官の支持も上まわっていることもあり皇帝高宗は六月八日に「停沙門拜君」の詔勅を発した。ただし、この詔勅を「沙門ノ拜君ヲ停ム」としたのは僧尼側の読解であって、「全唐文」では「令僧道致拜父母」の詔勅となっている。僧尼や道士は父母を敬せよということで、拜君停止とまでは明確にされていない。ためにこの問題は以後何度か唐王政で論議された。

善導がこの討議に加わったかどうかは詳らかでない。しかし前にも触れたように善導は父母の孝養は勸奨したが、王法へ屈することはきびしく拒んでいる。その著「観経疏」で、王舎城主のビンバシヤラ王が、戒を受けて仏弟子となった事実を明記した。さらに王后イダイケ夫人に至つては「汝はこれ凡婦にして心想は劣弱なり」ときめつけた釈尊の言葉を

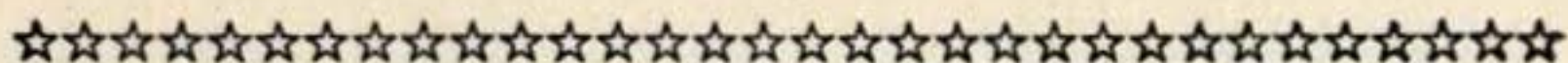
重視し、仏陀における思想の根底を唱導した。つまり王や王后といえども阿弥陀の救いを待つ十悪五逆の凡愚だという主張である。人間に差別なく、当然国王君主への礼拝なぞあり得ない。

ところでこの不拝、致拝の討議はほぼ十年後の竜朔二年（六六二）のことであって、この十年間に唐王宮内では「観無量寿経」がえがく王舎城そのものの惨劇がくりひろげられたのであった。

話を太宗崩御の直後へ引き戻さねばならない。

感業尼寺で先帝太宗の喪に服していた武照氏——後の則天武后は、皇帝高宗と密通をかさねてきたが、ほどなくその身柄を王宮内へ引き取られた。武照氏が妊娠していたからである。

頭を丸めた尼僧の黒衣にくるまれた腹部が醜くふくれあがっている。その姿を想像するだけで、スキヤンダラスである。では誰が武



暗
雲



照氏を宮殿内の後宮へ引き入れたのか。高宗の愛情であることは言うまでもないが、それだけでは実現はむずかしかったはずだ。高宗は皇太子から即位したばかりで、独裁権を握ってはいない。いわんや武照氏は先帝の妃、ないしは愛人の立場にいる。宮殿内に強力な支援者がいなければならぬ。

その支援者は高宗の正室王氏だったと言われる。彼女は関中豪族の出自で、母系の叔母には太宗の長女襄陽公主がいた。気品もあり貞淑な女性であった。だがこの王皇后には子種がなかった。

身分の卑しい女が生んだ皇帝の落胤は子宝に恵まれない正皇后にとっては価値ある果実であった。男児であれば自分が引き取って育て、折をみて皇太子に擁立すればいい。

武照氏は決して卑賤の出自ではない。彼女の父は軍人で山西や四川省の長官の地位にあった。しかも彼女の母親は山西省の有力な財閥だった。だが現在の姿は卑賤そのものだ。

世を捨てた出家尼僧の身で妊娠しているのである。

王皇后は武照氏を自分の居館に住ませた。彼女の黒髪が生えそろったころ、目でたく男児を生み落した。王皇后のねらいどおりだった。誕生の産褥室で武照氏に語りかけたことであろう。

「お見事、男の子でしたよ、女兒だったら……」

「女兒なら、どうなのですか」
「殺されていたかもしれない」

王皇后が去ると、武照氏は身ぶるいをかさねた。なるほど女の子では全く無価値な肉塊にすぎなかったであろう。

それにしても王皇后は軽はずみな言葉を洩らしたものである。やがてこの食言に王皇后は復讐される運命をになう。

男児だからと言って武照氏は安心できなかった。王皇后はこの男児を奪い、その生母を追放し兼ねないのである。宮殿の後宮それ自

体が「女の戦場」であった。

わずかな心の支えは初めての出産にともない、彼女の生母楊氏が宮殿の後宮へ同居してくれたことだった。この楊氏は夫と死別したあと、長安の陋巷でわびしく暮していた。

楊氏は悲境のどん底にあった。三人の美貌な娘に恵まれながら長女は結婚して一男一女を儲けたものの夫に死なれ、末女も結婚直後に一男を残して夫とともに夭折している。唯一人の希望は次女の武照氏だったが、帝王の後宮入りを遂げながら不遇のまま出家しなければならなかった。

長女は賀蘭越石という商人の妻となった。賀蘭家は三階教団の柱石である裴玄証夫人の同族である。一男一女をなして夫に死なれ、子供を連れて生母と暮していた。武照氏の姉にあたるこの長女は後に韓国夫人、娘は魏国夫人と呼ばれ、則天武后の人生に重要な地位を占める存在となる。

また妹の遺児はやがて善導と深くかわる

人で、当時は郭憚良を名乗っていた。

尼僧となって女の生命をいったん絶たれた次女の武照氏が、二十五歳と皇帝高宗より三つも年上の身ながら男児を生み落し、俄然よみがえったのだった。高宗はその男児を「弘」と命名し、母楊氏とその眷族に掖庭宮西側の新邸を与えて住まわせた。

母や姉、姪や甥がすぐ間近に住んでいるとは言え、武照氏の立場はすこぶる不安定であった。現に王皇后は冷めたい言葉を投げ与えている。

生まれた子が女兒だったら殺されていたであろう。武照氏自身も再び黒髪を落飾されて感業尼寺へ追いかえされていたであろう。

男児だからと言って安心はできない。その男児を王皇后に奪われて、武照氏が殺される事態も発生し得るのである。英王太宗が消えた唐王朝だ。何が起るか、わかったものではない。

この危険な立場において母楊氏らの存在は

ある晩、四人の侍婢は憚良少年を自分らの寢室へ招いて、茶菓を与えて聞き出そうとした。武照氏の生母楊氏は山西汶水の財閥の娘とまでは知られていたが、どんな素姓か全く不明だったのである。

「知りませぬ」

少年はきっぱりと答えた。

「あなたのお祖母さまですよ。何かの折に聞いたことがあるでしょう」

侍婢たちはじりじりする。楊氏が木材販売で財をなし、関中財閥ともつながっていると、流説はさまざまだったが確たる証固はなかった。

「さあ……」

「あなたは未だ年端もゆかないから、そんなことに関心はないでしょうけれど、こうして宮殿で暮すからには」

「何も聞いておりませぬ」

「照睞さまもそうですが、お母さまは慎しみ深いお方なんですわえ」

「ただこれを肌身離さず持っているように、と教えられました」

少年は首に吊るしたお守り袋のようなものを外ずした。

「何がはいっているのですか」

侍婢たちは好奇の眼を輝かして覗きこんだ。

「さあ、未だ開けて見たことがないんです。開けてはいけない、と祖母に言われてもいます」

「では妾が開ける分にはかまわないでしょう」

「……」

少年は当惑したような表情を結ぶだけで、否とも応とも言わない。

侍婢の一人がおそるおそる袋の口もとを開くと、なかに小さな木札が納まっていた。

「何か文字が書いてあるわ。妾は全然駄目なの。誰か文字の読める人、いますか？」

「貸してごらんなさい」

別の侍婢が木札を受け取り黙読していたが、じきに大声を発した。

「照暲さまの母上は観王楊雄さまのお血筋だったのですよ。姪にあたるお方です」

「観王とは？」

「隋天子の御一族で、楊雄殿下。たいへんお徳の高い人でした。だから母君は楊氏を名乗っていらっしゃるのですね」

この侍婢はなかなかの博識だった。ほかの侍婢とは知識差がありすぎて、説得するのにもどかしがっている。

「隋天子はそんなにお偉い方だったのですか」

「それはもう……かつて隋天子の御家来で、いまこの王宮で活躍なさっている方が多勢いらっしゃいます。亡くなった房（玄齡）宰相や魏徴大臣など、みんなそうでした。大きな声では申せないが、唐王朝などと言ってもじつは隋王朝をそっくり真似しているだけですよ」

「お手本はそちらだったのですか」

「最後の隋天子、煬帝さまはお舟で酒宴をしながら遠く南の揚州や健康城までお出かけになったものでございますよ」

見て来たように語る。

「よほど大きなお舟だったのでしょうね」

「竜頭で飾った三層建てのお舟」

「まあ、三層のお舟ですか」

「そうそう。あの蕭淑妃さまだって隋天子のお身内ですわ」

蕭淑妃は今をときめく後宮の女主人公であった。高宗の寵愛を一身に集めていた。

高宗には、現在五人の皇子がいたが、武照氏が生み落したばかりの李弘をふくめて四人の生母は無名の女性たちだった。蕭淑妃は後に雍王となる李素節を生んでおり、この男児が立太子する日も遠い先ではあるまいと自他ともに信じられていた。

「となると照暲さまはあの蕭淑妃さまと身分の上で少しも劣ってはいないということにな

るのですね」

「煬帝王のお孫さんと觀王のお孫さんですか
らね」

少年憚良は、こうした会話を表情一つ変えずに聞いていた。一言も余計な言葉をさしはさまない。

それが叔母武照氏からの命令だった。

果たして武照氏の生母楊氏が、觀王楊雄の姪であつたかどうか。確証は全くない。

流されたこの情報は、まづ先に王皇后の耳へ届いた。

そうか。あの尼僧あがりの女は、そんな素姓正しい家系の出身であつたのか。

うなずきながら王皇后はどす黒い希望で瞳を光らせた。

王皇后には子種がなかった。そのせいでか、高宗が彼女の寢室へ姿を現すことは殆んどなかった。このままでは後宮の生ける死かばねとなり果ててしまう。

いちおう三人の皇子の母とはなっているも

の、どれも身分いやしい女性が生んだ子供たちである。皇太子になれる資格はない。

その点、武照氏がライバル蕭淑妃と同格の出自だとすれば、彼女が生んだ男児李弘にも立太子の望みが出てきた。ここは武照氏とがっちり手を組んで、あの艶色だけが売り物の牝ん鶏蕭淑妃を追い落すのが得策、と計算した。

王皇后はひんばんに武照氏の部屋へ出入りするようになった。

その朝も乳児の枕辺へ立つなり、室内を見まわして言った。

「ずいぶん狭いお部屋ですこと」

「妾ひとりなら充分でございます。ただ皇太子さまをお育てする部屋となると、おっしゃるとおり手狭でございます」

「皇太子さまですって」

王皇后は聞きとがめた。

「この李弘さまです。今でこそ妾がお育てしていますが、お乳離れなさったら、皇后さま

のお手もとへお渡ししなければなりません」

「武照や、そんなことが出来ますか」

「出来るも出来ないも、これが王家の道でございます。妾は一個の乳人（めのと）にすぎませぬ。情に溺れて天子の法を誤まってはなりません」

「おお、武照よ」

王皇后は思わず涙ぐんでしまう。腹を痛めて生んだこの児を、正室である自分に差し出すことだけが王家の秩序を守りぬく道、とかたく信じこんでいる女——やはり由緒正しい育ちだったのであらう。

「一刻も早く天子さまに申上げて、もっと広いお部屋へ移らせてもらうことに致しましょう」

「それはなりません、皇后さま」

「何がいけないのですか」

「王家には厳然と法が存在しております。後宮におけるお部屋割りもその法にのっとって定められているのです。妾は才人ですから、

このお部屋でなければなりません」

当時の唐王朝、後宮は次のように分けられていた。

皇后の下に四人の夫人がいる。貴妃、淑妃、德妃、賢妃である。つまり蕭淑妃は夫人中の第二位。皇后をもふくめれば高宗にとって第三位の女性だったことになる。

この四妃の下に九嬪がある。昭儀、昭容、昭媛、修儀、修容、修媛、充儀、充容、充媛が各一人で、九嬪と味ばれた。

さらにこれよりランクが一つ下って、婕妤、美人、才人があった。各クラスが九人づつで合計二十七人だ。

なお下位があつて宝林、御女、采女だ。各二十七人づつだから計八十一名。

皇后を頂点に総勢百二十二人の婦人部隊が天子を取り巻いているのだった。

武照氏は最低でこそなかったが、クラスが一つ上位の「才人」にすぎなかった。上位に皇后をふくめ十四人、同僚は二十七人で、い

わば現在の会社組織で言えば課長クラスというところであろう。

それが天子の胤を生み落したのだ。慣例に従えば社長の皇后か、重役クラスの四妃にゆだねられるのだった。

「あなたは未だ才人でしたか」

王皇后にすれば意外な思いだった。皇帝高宗が尼僧姿の彼女を強引に後宮へ連れこんだのである。もっと高位の処遇があつて然るべきであろう。

「王宮には古くからお仕えしておりましたが、それは先皇さまの時代でございます。いったん落飾した身ですから、才人位を頂いただけでも有難いことだと思っております」

とことんへりくだったままで、本音のひとつかけらも覗かせようとはしない武照氏であった。

王皇后が部屋を去ると、武照氏は甥の憚良を呼び入れた。

「有難いことに、いま皇后さまは妾を妃の位

にお引き立て頂くと約束してくれました。しかし、いかに皇后さまのお口添えがあつてもこの部屋からひと飛びにお妃になることは難事です。妾は九嬪位へ昇格できるだけで充分なのです。あなたは侍女衆の間をまわって、武照が妃になる、と触れまわって下さい」

「触れまわると、どうなるのでしょうか。叔母さま」

未だ少年で、大人の手れん手くだに全く無知な憚良はあどけない顔で訊きかえしてくる。

「妃位は出すぎる。せめて九嬪位にということになるではありませんか」

何やら叔母の智恵深さはわかるにしても憚良少年は、直感的に後ろめたさが背筋を走った。重い足取りで侍婢たちの溜まり場へ出かけていった。

武照氏はやがて九嬪位の筆頭、昭儀への昇格が許された。

九

お尻に火が迫った、と身に泌みて感じたのは蕭淑妃である。

素性正しい武照氏が男児を生んで、昭儀へ跳ね上がってきたのである。しかも彼女の背後には王皇后がいる。

艶色で武照儀が高宗を引き寄せ、格式で王皇后がこれをつくろえば、蕭淑妃の出る幕などなくなってしまうではないか。

悩み抜いている蕭淑妃の前へ若い宦官が立った。かねて彼女がお気に入り劉泉という若者であった。

「じつは先日、武昭儀から折入って御相談を受けました」

「武昭儀からですって」

緊張で妃の表情は硬わばった。当面の敵から何を申入れてきたのであろうか。

「あの皇子のことです。王皇后が李弘王を手もとに引き取ろうとして、あの手この手で武昭儀を責め立てているようです。母子の情として手離すにしのびない。ここはお妃の力をお借りしたいと申しています」

「妾にどんな力が貸せるというのですか」
なお緊張の表情をほぐさない。

「天子にお願いして中書令さまを王宮から追放して頂くのが先決だと申しております」

「中書令をねえ……なるほど」

蕭淑妃は得心して大きくうなずく。

中書令は唐王朝における宰相の最右翼であった。

さきに先帝太宗の病い篤くなった折、実力者の長孫無忌は、この頭職を猪遂良に振りあてた。しかし崩御するや幾ばくもなく彼を追放し、柳爽なる人物に取って替えた。

柳爽は王皇后の伯父だった。長孫無忌の構想ではこの人事によって唐王朝内で甥高宗の立場は鉄壁になったと信じた。すでに高宗の

舟賊の宝徳建に殺された。だが彼女は宝徳建の王妃に乗り替わり、さらにその宝徳建が滅されると、その征服者唐の世祖は、またしても彼女を妃として迎え入れたのである。

煬帝との間に出来た娘は太宗の妃となり、さらにその妹の娘が蕭淑妃だったのである。

天性の美貌と、それにまさる類い稀れな艶色は如何なるライバルをも近づけぬ威厳と冷徹な美があった。これがまた男性の独占慾を強く刺戟するはずである。

ただし、蕭淑妃には重大な欠点が一つある、と武照儀は信じた。

頭脳である。人間智である。外貌に恃むあまり、そちらの鍛えが全くおろそかになっていたのである。

この点は王皇后も同じで、その愚かな女の智恵で王皇后はいまひたむきに蕭淑妃を憎んだ。そして蕭淑妃もまた王皇后を憎みはじめるに至った。

だが武照儀は、いっさいの証固を残さなか

った。宦官の劉泉に話を持ちかけたのも彼女がじかにしゃべったわけではなかった。甥の惲良にささやかさせたのだった。

これだと、かりに武照儀の暗躍が洩れた場合でも「いつ妾がそんなことを……」と言ひ抜けられるであらう。

情報社会は、それが過密になればなるほど真実から遠ざかってゆく場合もあり得るのである。

中書令柳爽の失脚は少々時間を要したが、翌年の永徽五年（六五四）に実現した。吏部尚書という吏部の長官へ格下げされた。王皇后の権力がとみに失墜していったことは言うまでもない。

だが武照儀が蕭淑妃に天下を取らせる気持など、さらさらなかった。王皇后と歩調を合わせて蕭淑妃の没落も策さねばならない。その方略は、武照儀の頭脳で充分に熟しきっていた。

（つづく）

◎読者の皆様へお願い

弊会会員の年会費は三、〇〇〇円です。月刊誌『浄土』を細々と発行しながら、念仏信仰の増進にと努力しています。新しい読者を広くご紹介下さい。

また誌面においては、『浄土』誌と会員諸兄の皆様とのより一層の繋がりをはかるために、従来よりたびたび企画されたことでもあります。誌面の数ページをさいて、不定期ながら随時「読者のコーナー」を設けております。左記要領で、どうぞふるってご投稿下さい。誌面充実のために、宜しくご協力下さいませ。

- 一、内容 自由（生活の一コマや我感あるいは思うことなどをエッセイ風におま）とめ下さい。
- 一、枚数 四百字用紙五〜八枚程度
- 一、締切 毎月五日

法然上人鑽仰会

「浄土」購読規定

会費一カ年 金三、〇〇〇円

（送料不要）

浄土 五十二巻 四月号

昭和十年五月二十日

第三種郵便物認可

昭和六十一年三月二十五日 印刷

昭和六十一年四月一日 発行

編集人 宮林昭彦

発行人 佐藤密雄

印刷所 長谷川印刷株式会社

東京都千代田区飯田橋一―十一―六

発行所 法然上人鑽仰会

電話東京二六二局五九四四番

〒二〇三 振替東京八一八二一八七番

第五十二卷 四月号

昭和十年五月二十日 (第三種郵便物認可) 毎月一回一日発行
昭和六十一年三月二十五日印刷 昭和六十一年四月一日発行